

## 浦島太郎 その2

坂井義民

### ○まえがき

「浦島太郎」の物語は、竜宮城から帰った太郎がお土産でもらった玉手箱を開けると白い煙が出て太郎は真っ白な鬚爺さんになってザ・エンドですが、それから次はどうなったか想像しまして「浦島太郎その2」を作りました。

**作者はこのあと「浦島太郎のあらすじ」「キャストの紹介」「竜宮城の説明」「浦島太郎のルーツと生活」等についてオリジナルな記述で記載し後の本文に繋げてますが周知のおとぎ話なので、紙面の関係上、省略させて頂きました。**

### ○浦島太郎 老後の苦悩

遊びほうけた浦島太郎はボチボチ帰らないといけないと気づき乙姫様に会い

太郎 乙姫様、随分のんびりさせて貰いました。私は浜に帰って仕事をせねばなりません。釣りのやり方も忘れまして。浜へ帰りましたらお礼の手紙を差し上げたいのですが、文字も忘れまして。

乙姫 浦島さん何をおっしゃるのですか。そのお気持ちで十分です。お土産にふさわしいものはありませんが、この玉手箱を差し上げましょう。みだりに開けてはいけません。わかりましたか？

浦島太郎が浜へ帰ってみると昔の様子は何もなくて知人もいない。24～5才だった釣り師は50才を過ぎていた。定職はなく、家族もいない。魚を釣っても市場へ出すほど釣れるものではない。ひと月もすると竜宮城が恋しくなっていた。

そこへ例の亀が近寄って来て

亀 浦島さん竜宮城のことを思い出しているのでしょうか。

太郎 何とそのほう、わしの気持ちがわかるのか。そのとおりじゃ。

亀 へへん。顔にそう書いてありますよ。私の背中に乗って下さい。私も竜宮城を一目見たいものですから。

### ○浦島太郎 二度目の竜宮城へ

亀も慣れたものですんなり竜宮城の入口へ乗りつけてくれた。

乙姫 おやおや浦島様。ようこそいらっしゃいました。少しお痩せになりましたか？

太郎 陸へ帰って見たらひどく様子が変わっていて人も家もないので大変な不安を感じ、生きる方法がわからなくなりました。ホームレスになるのかと思っていたら深い縁のある亀に出会いここへ連れて行って欲しいとお願いしたわけですから

乙姫 それはお気の毒。鯛や平目に伝えておきます。どうぞごゆっくりなさって下さい。

太郎が見た竜宮城は以前見た竜宮城とは様子が違っていました。最初に来た時は目にも眩しい宮殿のようであったのにどこかひっそりとしている。鯛や平目が舞を踊っていたのに今はくらげがいる。よく聞いてみると人間という地球にとっては寄生虫のような毒虫が海を汚して、下等動物しか住めなくなったとのことである。

鯛 浦島さん陸地では排気ガスやスモッグ・黄砂、最近ではPM2.5などが発生して環境がひどく悪いそうですね。人間という生き物は空気を汚すだけでなく海水も汚すのです。東京電力は福島県に原発を造り、太平洋に汚染水を垂れ流しにしているのです。東京には原発を造らず遠方へ造って知らぬ顔です。私たち鯛は汚れた海はいやです。宮殿の女官に相談しましたらクラゲさんが「代わってあげるよ」と快く聞いてくれたそうです。

太郎 少し物足りないが陸で淋しい思いをするよりはいいよ。フグもアジもいて結構じゃ。わしは、魚釣りが本職じゃがクラゲを釣ることはできない。

クラゲ 浦島さん人間は鯛や平目とか鰯の刺身を好んで食べますがクラゲも美味しいですよ。細く切ってポンズをかけワサビを少し添えて召し上がって下さい。あらいやだ。地球の寄生虫の人間に食べられると考えると鳥肌(クラゲ肌)がたつわ。

#### ○竜宮城の台所事情

鯛 浦島さん海の中もだんだん住みにくくなりました。水が汚れたうえ食料も値上げ、私たち鯛はアミエビを主食としていますが南極海で捕れたエビを日本まで運び、冷凍してまたこちらに運び、解凍してやっと食べることが出来るのです。一昨年春から消費税が8%に上がり、うわさによりますと先では10%にアップするそうですね。いや、いや！

平目さんはグルメで生きたものしか食べないのです。石ゴカイ・青ゴカイが好きですがこのゴカイ、手作業で捕るためビックリするほど高いのです。そのようにグルメをしているので刺身が美味しいわけですね。—

平目 アラ、私たち平目は決して高いものばかり食べてはいません。粗末なしょくじでも美味しくなるような柔軟体操をしたり、海草を食べ、体内で美味しいエキスを混入する技術を開発したのですよ。刺身のアラは捨てないで水炊きに入れて下さい。骨はカラアゲにさせていただくととてもおいしく全部食べられますよ。

#### ○浦島太郎陸へ帰る

浦島太郎は豪華で美食と旨い酒に酔い知れた毎日を過ごし、またまた月日の過ぎること等気にすることさえ忘れていた。ある時もう10日位お世話になったから陸へ帰ろうと思いついた。実はこの時20年も過ぎていたらしい。

太郎 乙姫様この度も大変お世話になりまして、私も陸が恋しくなりました。来たとき

より少し太ったように思います。

乙姫様　そうですね。お見かけしますと10キロはお太りになっていらっしゃいますね。  
早速あの亀さん呼びましょう。

この度はお土産は何もありませんよ。

亀はすぐ迎えに来た。

亀　浦島様お待ちどうさまでした。浦島様この度はお太りですから到着は遅れま  
すよ。

太郎　それはやむをえない。何時間かかってもよいから送ってくれ。

○浦島太郎のナゾ

亀は途中とまることなく陸へ送ってくれた。浦島太郎は大きな黒松を覚えていたの  
で、そこへ行って見た。そこは小高い丘になっていて地域全体を見渡せる場所  
である。なんだかおかしい。人がおらん。家もない。自分の故郷というイメージは全く  
ない。小鳥の鳴き声も聞こえない。浦島太郎は最初に竜宮城に行った時3年。2度  
目に20年いて25歳の釣り師もそろそろ初老となり、衰えを感じていた。

本職の釣りを再開するにも道具はなくし、ポイントも忘れた。市場に出すほど釣れる  
見通しはない。寝る家もない。浦島太郎は途方に暮れ、ひどく落ち込み、乙姫様  
もらった玉手箱を開けてみることにした。とたんに白煙が噴き出し、見違えるほどの  
鬚爺になった。何一つ出来ない浦島太郎は途方にくれてボンヤリしていると、日が  
沈みそうになった。月は満月でよく輝いている。野宿をするしかない。月を見て横に  
なったら一句できた。「枯草を 野宿につかい 一人寝かな」少々夜露に濡れたが  
あまり冷え込みも無くよく眠れた。

浦島太郎は二度も竜宮城へ行き、そこは何不自由のない、俗世間を離れた平和な  
世界で桃源郷のようなところで生活したのでクセになってしまった。こんな鬚爺になる  
のならお断りすればよかった。が既に遅い。いくら礼を尽くしたと言え、三回も居候に  
行くなどとはいかがなものか。が、しかたない。ここはなりふりかまわず乙姫様にお願  
いするしかない。

太郎　オーイ亀よ。迎えに来てくれ。

亀　浦島さん。お待たせしました。安全運転でまいりますからね。

浦島太郎はもはや竜宮城に着いた気持ちになっていた。その時、潜水艦ほども  
ある大きなサメが迫って来て浦島太郎は一口で吸い込まれてしまった。

従って浦島太郎の墓も位牌もない。勿論戒名もない。浦島太郎はこのような最期  
であり、ナゾを残して成仏したのである。合掌